ウンメガ！　赤い武器と女神

Sowelu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウンメガ！　赤い武器と女神

【Ｎコード】
Ｎ４５５０Ｐ

【作者名】
Ｓｏｗｅｌｕ

【あらすじ】
ウィン・セレスは森で、光の中から現れた少年と出会った。少年は彼女の母国ハーダンティスでは見かけない顔立ちと奇妙な黒づくめの格好をしている。少年は“ニホン”から来たというが、そこはウィンのきいたことのない場所だった。そして彼が手にしている物は赤い刀身を持つ大剣。
それは偶然ウィンも手にしていた赤い武器とどことなく似ていて。
全世界を絶望に陥れた『審判の日』から七十年後の世界。
不思議な力に導びかれ、現れた少年「シゲル」に与えられた使命

とは?

彼女のもとが最良だろう。（前書き）

・高校1年生の時に、出版社に投稿し1次選考を通らなかった残念賞です（笑）。　日の目を見る機会があまりなかったので、載せてみたくなりました。　この作品をもっと良くして、またどこかに投稿したいと思います。　もっとよくしたいので感想やら指摘やらお願いします。

彼女のもとが最良だろう。

※

「何で、あたしがこんなことまでしなきゃいけないんだ」

季節は夏。溜息を愚痴とともに吐き出しながら、その少女は青々とした草の上を歩いていた。成人にはまだ見えない容姿。身に着けた衣服は季節に反してどちらもウェアのようなもの。ただそれらの衣服は、アウトドアライフにむきそうな素材で作られているようだった。さらに格好には似合うが、背丈には似合わない大きなリュックを背負っていた。

事情を知らない他者が見たら、彼女は自然と戯れようとしているのだろう、とそう考慮するものもいるだろう。ただ、今草原を歩いているのは少女一人だけだった。これが他者の導く仮説を鈍らせる。周りの景色は乏しく、生い茂った草原が広がっているばかりだ。唯一、少女の格好に合う地形を考えると、進行方向に存在する森林程度だろう。その背後にはそこから来たと思われる街が遠くに見えた。少女の目的地と思わしき森林帯は、現在地から遠く距離がある。歩いていくには半時あっても足りなさそうだ。その位置はちょうど街と森林の中間辺りだった。

成年者に達しているように見えない少女が、広大な草原で一人取り残されたように歩いている光景は、なかなか異形だった。

少女がまた投げやりに呟く。周りに誰もいないこの場では、それも虚しいものだ。

「ったく、どこの国に街の外で狩りをする女子がいるんだよ」

……異形な状況は、これまた異形な真実を与える。

『狩りをする女子』という言葉に、少し憂鬱そうだ。当てはまっているのだから仕方がないだろう。何処の国でも狩りが似つかわしい少女などごく稀な存在だと思われる。

「あの、バカ親父が」
　原因となったらしい父親はいったい何をしでかして、少女をこの場に追いやったのか。ただ子供一人を狩りに行かせるとは、果たして『バカ』で済ませられるか疑問だ。人間が狩りと言うからには凶器となりえる道具を使うのだろうし（素手ではやらないだろう、多分）、得物によっては命に関わる。少女の父親は子供の安否を気遣うということに、大いに欠けている。
　その他の大衆なども彼女の考えているように、少女が一人狩りをする行為を認める者はごく僅かだろう。彼女とてやりたくないの当前のこと――
「ああ、？面倒？」
　……もっと指摘できる部分が他にあると思えるのは気のせいか。世間にとって危険だと思われる行動もこの少女には気にならないみたいだ。親子共に、能天気なのか、それこそ世間知らずなのか、どことなく外れている。
　寂しさを紛らわすためか、父親への鬱憤を晴らすためか、独り言が多く少女は歩き続ける。
「しまいにはこれも修行だ～！　とか言いやがって何の為の修行だよ。母さんまで後押しするし。あ～少し強くなり過ぎたかぁ」
　これまたいったいどんな生活を送っているのか。分かることは、彼女は強くなり過ぎならしい。目的不明なことを修行という名目で何かしらを行っているためとのことだ。その修行には狩りも含まれている（明らかに後付されたようだが）。親がこの調子で強く育ってしまえば、周りが考える危険が面倒と思えてしまうのは、ある意味当然のことなのかもしれない。
「フェオもいれば少しは楽しくなりそうなんだけどな～、あの親父、この子には危険だから～なんて言いやがって。こっちの心配もしろ！」
　と、またここにはいない相手に向かって愚痴る。面倒な仕事だと思えるぐらいなら、心配されなくても良いのではないだろうか。

「がさつで適当で社会的にも浮きすぎなんだよウチの親は、こないだだって……」「だいだいあの程度の怪我で、娘に押し付けるなんて、ふざけんな」などと親に対する文句を時折（むしろ常に）口に出しながら、少女は歩き続けていた。
「……まあいい、ラナは大好物だし。でも父さんには少ししか分けてやらない」
ようやくと言うべきか、目的地に着いたときには前向き（？）な考えも抱いていた。
懸念となっている狩りは、やはり進行方向にあった森林で行うようだ。

少女が狩りをするのは今日が初めてらしい。森林に入るあたりで呟く言葉にそのことがあった。その手順については特に難しいことはない。ラナの生息している場所については詳しく聞き、あとはその場所でラナを捜索し狩る。今日彼女がここですることだ。幸いにしてラナは肉食でありながら人間の脅威にはなりがたい。
それでも、脅威ではないことが狩りの結果に繋がるかはまた別のことだ。今のところ成果は芳しくない。まだ太陽が真上にいたるまで何時間か必要だが、片道が結構かかった道のりだ。午前中だけで終わらせて帰ることにしても十分な成果は得られまい。彼女もそれを承知か午後も通して行うつもりのようだ。
ラナの生息している流れの緩やかな河川付近でひとまず手を止めた。無造作に放置されたリュックへと近づき中を覗く。中身を見るなりしかめっ面となり、詰め込まれていたレジャーシートを広げ、腰に下げているラナの入った皮袋を置いた。腰を下ろし、一人森林浴を（不機嫌そうに）味わいながら弁当をリュックから取り出す。「いつの間にこんな準備万端にしてんだが」などと言い、また溜息。そう言うのも少女のリュックは、父親がいつも使うものよりも大きいものだったからだ。渡されたときは中身を確認する気になどなれなかった。そして今、中を覗いてみれば、虫除けスプレーや傷薬、タ

オル、レインコート、懐中電灯、キャンピングナイフといったまさにアウトドア用の物が詰め込まれている。この環境では、使い道の不明なナイロン製のロープや、ステンレス製のスコップまで入っていた。

母親あたりが娘の初めての狩りを、一応心配して準備をしたのだろう。しっかりと狩りをさせようとしていることは、気にしてはならないことかもしれない。

少女もしかめた表情のまま、それ以上のことは言わなかった。一通り中身を確認し、弁当にありつくことにするようだ。フォークを動かしながら、少女はシートの端を止めるために置いた皮袋を見つめる。

「今日は少し不景気なのかねぇ」

それにはラナが三匹入っていた。いつも父親が捕まえる量には五、六匹足りていない。

……でも初めてなら仕方がないよな。

一見合理的な考えを抱いてみる。しかし彼女の気質が、そんな理由で納得することを許さなかった。ラナを狩るのは食糧確保のためである。切羽詰った生活を送っているわけではないが、父親の狩る量に劣っていることは、やはり悔しい。いつも変なことをさせる父親が行っているこの仕事。あんな父親なのに超えられない。

少し沈んできた心情を紛らわすためであろう。彼女は食事の手を止め、脇の道具を手に取り底の浅い河川へと歩み寄った。素足になり、足を入れてみる。この時期の河川の水はとても心地よかった。

緩やか流れを足で感じ、今回ラナ狩りに使用している道具を見てみる。

「こんなのあたしんちにもあるんだな」。

半ば強制的に狩りをすることになったとき、せめてものの抵抗として、普段父親が使わない物を持ってきていた。蔵の中をあさり見つけ出したのである。

彼女は『それ』を軽く振り回していた。

……？

「――――ッ！！？」

突如、閃光が走った。

わけの分からない事態に思わず、声にならない叫びを上げ尻餅をついてしまう。「ひゃあっ！」先ほどとはこめられた意味の違う叫びだ。後ろからついたときでは、結構冷たかったのかもしれない。そうしながらも強い光から目を庇った。

光の発生も束の間で徐々に収まっていく。光はここから四、五メートル離れた河川から発生したようだ。まだ残光がある。

何が起きたのか全く予測できないまま事態を見守った。強い光を受け目が眩んでいる。

それが元に戻ってきたころには光の発生は完全に止んでいた。

「ぅん？」

眩んだ目をこすりながら見つめる先に真っ黒で変な何かがいた。

彼女のもとが最良だろう。（後書き）

後々続きを載せていきます

他の者では成し遂げられない。（前書き）

若干体験談も含めてお送りします。

他の者では成し遂げられない。

○

人の雄叫び声と爆撃音、そして獰猛で、それでいて壮大な咆哮が聞こえている。生物の声だろうか。何の生物かまでは分からない。体は意思とは別で勝手に動いている。長い何かの端を両手で持ちながら必死に走っていた。

立ち止まり右側を振り向いた。耳か、それとも直接頭に響いてくる荒い息遣いは、この体が発しているものらしい。視線の先には大きく煙が立ち込め、そこにはちらちらと見える、巨大な何かが激しく動いているのが影となって映っていた。

おそらく生物であるそれは苦しんでいるように見える。

誰かが煙の中に向かって突っ込んだ。その人物も細長い何かを両手で持って。

すると煙から鼓膜を破るが如く、この世の生物から発せられる音とは思えない咆哮が上がった。煙に映る像が声とそれと連動して大きく揺らぐ。

突入した人物が行った行為によるものかは定かではないが、咆哮が鳴り止まないうちに、この体も煙に向かって駆け出していた。視界は煙で覆われ、体は何かを足枷に飛び上がり、雄叫びを上げながら両手に持つものを振りかぶる。

一瞬、煙の中から光り輝いているものが見えた。

それはこの生物のものだろう、瞳。憤激しているようにも見えるその瞳は、濡れている。

自分のものではない体は両手に持っているものを、その瞳めがけて振り落とした。今はそれが何かよく見えた。

両手に持っていたもの。波打つ刀身を持ち、濃い赤色に染まった大剣。

剣は濡れた瞳を貫き、
瞬間！……。

飛び起きる。目が覚めたその場所は自分が通う学校の教室で、華（しげる）は自分の席に座っていた。まず自分がなぜこんなところで寝ているのか半覚醒状態で考え、無意識に黒板の右上にかけられた丸い時計を見てみる。どうやら親の迎えを待っている間に眠ってしまっていたようだ。

彼の家はここの高校から歩いて登下校すると何時間もかかり、かといって今の季節は冬。降雪が全国でも相当な地域に属しているこの県では、冬に自転車を使うことなど不可能と言っていい。さっき時計を見たとき、時刻は五時一〇分ごろだった。学校は普通三時過ぎに終わるが、親は仕事帰りに学校によるので迎えが来るのはいつも六時半過ぎになる。

そのかなり空いている時間を部活動などに当てたりして、時間を有意義に過ごせばいいものを、中学から続けていた運動部は半年も経たずにやめてしまった。続けていく意義がない気がしたのだ。だからといって他の部に入ることもなかった。

彼には大学にも通える頭脳を持ち合わせていたが、その環境に身を投じる動機も楽しみもない。何も考えていない人間が大学に行って金をかけても仕方ないという、親には喜んで貰えそうもない配慮までかけていた。

この高校には今年度から入ってもうじき進級もする。だがいまだに、打ち込めることもやりたいことも決められずにいた。高校生活で、はじめて迎えた冬の季節は、教室で適当に時間を費やすか、多少距離はあるが歩いていける程度の本屋に寄るなどを続けていた。

……何もこんな時間帯にこんな場所で寝ることねぇだろ俺。つーか誰か起こしてくれてもいいんじゃないか。

周りを見渡してもすでに誰もいない。この時間では教師の見回りも来ない。廊下で走る音が聞こえるのは、グランドが使えない運動

部がいるからだ。文化部はそれぞれ固有の場所で、自分のような帰宅部はすでに親の車などで学校を出てしまったのだろう。その他にも、この高校には徒歩一〇分程度で通っている生徒も数多い。親の迎えが遅いものは、その近場にいる友人宅で時間を過ごしているらしい。

部活も何もせず、休み時間はほとんど一人で読書をしているような浮いた存在。そんな自分に気さくな友人など一人も出来ていなかった。というより華自身が、そういったことにまるで興味を持っていなかったのだが。……まあ、起こしてくれっつうほうが無理か。

親がここへ来るのは一時間以上も後だ。今日はここで宿題でも片付けて過ごそうと思ったが、寝て起きてそんな気は失せてしまった。雪道を歩くのは少し面倒だが本屋で時間を潰すことにしよう。

華は宿題が出されている教科を机の中から鞄へ移動させ、本屋で待つことを親にメールで伝えた。教室を出て廊下を歩き階段を下りる。西側の階段を三階分降りる途中、階段や廊下を走る野球部や陸上部とすれ違った。クラスメイトもいたが無言ですれ違う。

彼らは教室で寝ている自分を見ただろうか。自堕落な人間だとか思っているのだろうか。などと考えてみるが、華にはクラスメイトが何故こんなこと続けているのか理解できなかった。

彼らは昼休み等で集まったりしていると練習がきつい、休みを増やせなどや、顧問に対する悪口などを言い合っていることがよくある。そんなに不満があるのならさっさとやめてしまえばいいと思った。しかし相手をする意味などない。陰で不満を言いながらも、続けることが立派だとしているのだろう。部活動以外の連中でも過剰に不平、不満を口に出して生活している奴らが多くいる。

それだけならばまだ良いほうだった。財布の紛失、自転車の盗難、校内での喫煙、いたるところに散らばるガムやゴミ、暴力沙汰も後を絶えない。幸か不幸か、いまだかつて現場に居合わせたことはない。しかし校内の人間が行っているとはよく耳にする話だった。

身近にそんな行いを平然とする人間がいることが、耳障りで、目

障りな対象でしかなかった。忍耐力とは何なのだろうか。秩序とは何なのだろうか。自分たちの行いを不愉快に感じている人間がいることに彼らは気づいているのだろうか。

周辺の人間だけではない。

人間が作ったテレビという映像通信機器は、人間の悪い部分を世に知らせるため作られたのだろう。そう思えるほど、ニュース番組には暗い話題が多かった。見ていてイライラする。

そんな汚染された現実から逃避するため、華はよく本を読んでいた。クラスメイトや犯罪者たちと同じ、人間が生み出したものだとは思えない書物。非日常な世界観を持つものを良く好み、彼の心を楽しませた。休み時間等に読んでいると、周りからは本好きだと思われ、「すごいね」と褒め言葉を送る者もいた。すごいと思われる部分がどこにあるのか、華には全く分からない。……やはり、興味を持てない存在だ。

さほど大きくはない学校のため、階段を下りたら玄関はすぐそこにある。靴を履き替え、さらさらと雪の舞う銀世界へと出た。

今年は例年より雪が少ないらしいが、現場からはあまり分からない。寒いものは寒いし、歩き辛いことに変わりはない。

首や顔に当たる雪に体を震わせ、やはりこの時期は黙って屋内にいるべきだったかと後悔した。校内の暖房器具は、学校が放課になると止まる。それでも外よりはましだろう。

寒い理由を他にも挙げるとすればコートを着ず、学生服以外ではカーディガンしか着用していないということもある。誰に対して意地を張っているのか、なんとなく厚着をすることが躊躇われた。いろいろと考えてしまう年頃なのだ。

校門を出ると、規模はたいしたことないかもしれないが田舎特有の景色、水田が雪に埋もれて広がっている。そこを横切る細道を通るのが本屋の近道だ。問題はその道が、冬は車が通行禁止になるため除雪があまり行き届いていないということ。靴に雪が入るのを覚

悟で歩くしかない。
華の家でも毎年屋根の雪を下ろし、歩く道を確保するため除雪は必死にやる。それでも雪はすぐ積もる。特に屋根の作業は、落ちて大怪我する人もいるのが雪国の悲しい現状だ。雪の少ない地域に、これらを送って子供たちに遊ばせているのをテレビで見たことがある。どうせならここら一帯のもの全てあげたいと半ば本気で思った。楽しいだけのものではないと諭してみたい。
人の足跡だけで除雪されているようなところを歩いていると、予想通り――むしろ予定通り靴の中が濡れ放題になってきた。昨日雨が降ったため雪の状態も最悪である。だんだんとその冷たさや気持ち悪さに慣れる、と思ってみるも、気のせいでしかないことが余計に悲しい。
華は極力足のことを考えないことにし、思考を別のことに向けることにした。
そして考えたことは教室で眠ってしまったときに見た、夢のこと。
夢というのは起きたら大抵の内容は忘れてしまうものだと思っていたが、まだ鮮明に覚えていた。自分の意思とは関係なく体が動いたため、大まかな状況しか分からなかったが、なかなか迫力あるものだった。意識の片隅にあった小説やテレビゲームの内容がごちゃ混ぜになって、夢として出ただけかもしれない。しかし、自分の脳味噌を少し感心してしまった。
……どうせならもっと広い視点で見てみたかったけどな。
夢に対して注文しても、同じ内容を見ることはなかなか難しいものだ。広い視点で見ることなど、もうないのかもしれない。自分の脳内で起こった仮想的なものに未練を抱いてしまうのも変な気がするが、それだけ面白いと感じてしまったというのが事実だ。
細道を通り抜け住宅が少し密集している地帯に入り、赤信号のため立ち止まる。思考を別に向けていても靴とその中はずぶ濡れだ。冷たい。
華は現実逃避を続行した。

どういった経緯であんなことになって、いったい何と戦っていたのか。何者かが煙に走っていったとき何があったのか。持っていた赤い剣はなんだったのか。

考えていくといろんな疑問と仮説が想像でき、少しだけ有意義な時間だった。

でも最後当たりで見た、あの生き物の目……泣いていたか？

夢の生物が何を思っていたのか分かる筈もない。結局は仮説だけで答えは得られないのだ。だからこそ自分だけの世界へと入り込める。

人間によってもたらされる自分の死を恐れていたのだろうか。自分の意思とは別に動いていた体はどう感じただろうか。

その体が自分自身だったのかもしれないが、華が理解する術は多分、もうない。

……また見たい。

可能性が低いことをまた考えながら青信号になったため進みだした。当初の目的の本屋まであと少しだ。田んぼや住宅が溢れていた場所とは一変して、もう周りには本屋以外の店も多く立ち並んでいた。出たところから少し歩き、左手側の信号を渡る。

目的の本屋についた。頭や肩などに降り積もった雪を払う。

さて暇つぶしといきますか……。自動ドア一つ抜けいざ店内へ……

……？

「――ッ！！！　ぐがあッ、ああ！　あああああああああああああああああ！」

突然すさまじい激痛が頭、頸、胸、腕、足といった五体全身に駆け巡った。

普段おとなしく、我慢強く過ごしてきた自分が発しているとは思えない、絶叫。

周りを気にする余裕など微塵もない。

激痛が意識を失わせることを許さず、その場に倒れこんだ。

壊れていきそうな体の視覚からとても眩しい光を感じた。
光は、体を覆う。
光が消えたとき、そこには僅かな雪がとけて濡れているだけだった。

他の者では成し遂げられない。（後書き）

割とありがちな展開かもしれませんが、そこはご愛嬌で……

ハーダンティスへようこそ。（前書き）

サブタイトルをセリフっぽくしている意味は特にありません。なんとなく特徴的にしたかったという思いです。

ハーダンティスへようこそ。

意識が回復したとき最初に感じたことは、右下半身が濡れていることだった。

どうやら浅い水の中で蹲(うずくま)って倒れていらしい……水？

華が倒れている場所には確かに水がある。さらに水溜りなどではなく、それは流れているようだ。だが本屋の出入り口付近で倒れても、水の上に運び込まれることはあるまい。

ならばここは何処か？

一刻も早く立ち上がって辺りを確認するべきなのかもしれない。そう思っていても体は、先程感じた痛みがまたくるのではないかと恐怖で動けなかった。

しばらく黙ったままで、事態を見守ることにしよう。頭は水から出ているので呼吸に支障はない。それで変化が得られるとは思いがたいが、もしものときの心の準備がまだだった。準備といったところで、実際どうにかなるものではないが……。

次、痛みが襲ったら死ぬかもな。

「なっ何だ、あれ？」

少しはなれたところから女の声が聞こえた。その声は上擦っていてこの状況に驚いているようだ。華自身も水によるもの以外で体が濡れてきたのを感じる。蹲って固まっている華に疑問を持っているようだが、こちら側も疑問だらけだというのにどう反応をとればよいのか。

水のはねる音がした。音は接近している。

「な！？　人じゃん！」

さすがに起きて何らかの対応をとらなければならない。しかし、痛みとはまた別の恐怖心が体のコントロールを奪っている。女は何者か？　音が華のすぐ近くで止まった。

すると、背中を硬いものでつつかれていることを感じた。「生きてんのかな、これ」などと言って、さらにつつき続けられる。
何だか少し――いや、かなり鬱陶しい。
「……やめろ」
この一言につき、痛みのための心の準備などどうでもよくなってしまった。すぐそこで驚く声が聞こえる。とりあえず、それでも慎重に体を起こそうとした。幸いなことに痛みが襲ってくる気配もなければ、後遺症もない。
安心すると、体の正面に何か感じた。華は蹲っていると同時に何かを抱えている。手触りだけで感じ取ってみると相当な長い物のように思われ、途中で枝分かれしているかのように二箇所突き出しているようだった。
改めて体を起こして見てみると、
「なあ、生きてんなら早く起き――」
「何だこりゃあ！」
また隣で何か言っているのが聞こえた。しかし、ホント今はどうでもいい（まずいのかもしれないが）。
体を勢いよく起こし抱えていたものを手で持って、よく見た。
華が抱えていたもの、それはアニメやゲームでしか見たことのない、現代では実物があっても（捕まるから）所有してはならない物体。
剣だった。
おそらく一メートルはあるだろうか長い刀身を持っている。それが長いのかどうかは推測だが、中学の修学旅行で浮かれて買った木刀の刀身部分よりは、はるかに長かった。
今は鞘に収まり、さらに鞘の差込口付近についている紐で縛られているため、刀身が本物なのか分からない。ただ、大きさの割には軽すぎるのでオモチャではないかと思えてきた。
華は鞘の紐に手をかけ、外そうと――
「無視すんなあああ！」

後ろからかなりの力で――おそらく足で――どつかれた。正面からまともに水に倒れこんでしまった。ほぼ全身が濡れた状態で立ち上がり、振り向きざまに怒鳴る。

「いきなり何するんだ！」

視線の先にいた人物は、自分と大して歳は違わないように見える少女だった。ただ、日本人、少なくともアジア人ではない顔立ちをしていた。肩にかからない短く整えられた髪は金髪で、気の強そうな瞳は、青色。さらに補足すると、その姿は今にも山にでも行きそうで、少し長い棍棒みたいなものを両手に一つずつ持っていた。小柄な体格にはあまり似合っていない。というか変だ。

「それはこっちの台詞だ！　何度呼んでも無視しやがって！」

一気に距離をつめられ、半頭身分、低い位置から思いっきり睨まれた。

人種的に日本人ではないのだろうが、今では日本の国籍を持つ外国人もいる。言葉遣いは少女の割にはかなり汚い、それでもきれいな日本語だった。

何度も呼ばれた気はしないのだが、相手にしてなかったことは事実なので、ここは素直に謝罪をし、ここの場所も聞こう。蹴られたのは大いに不満だが。

「……申し訳ない、ちょっと今動揺してて」

と言いつつも、思ったより冷静に対応している自分が誇らしい。

しかし、

……どうなってるんだ？

辺りを見渡すと、先程まで倒れていた場所は底の浅い河川だったと知った。周りは木々で囲まれて、この場所が広く空けた空間になっているようだ。その自然の空間に場違いな、レジャーシートが一つ敷かれ、まるで小学生の遠足のようにリュックなどが置かれていた。にしても大きなリュックだが。あたりを見渡しても、ほかに人がいないため少女の所有物としか思えない。――何だって俺はこんなところに？

「なあちょっといいか。ここはいったい何処――」
「それになんだ、おまえの格好。いきなり真っ黒で不気味なもんが現れたから驚いたじゃないか！　後ろから濡れるし、どうしてくれる！」
何故だろう？　自分よりも背が低い筈なのにでかく見える。威圧感という奴なのだろうか。気づいたら半歩下がっていた。
どうしてくれるもなにも、どうしろというのだ。それにこちらも、そっちのおかげで全身びしょ濡れ。むしろ俺のほうが被害大きいじゃないか。
だが不思議と全身が濡れても、寒さは感じない。――今この場所が冬ではないかのようだ。
自分の続けようとした言葉を途中で折られ『不気味なもん』扱いされたのは、またもや大いに気に障ったが、言われたとおり格好は黒尽くめだ。華の着用している学生服は、当然上下とも黒で、日本人であるため髪も瞳の色も黒、おまけに靴まで黒のローファを身に付けている。高校生では結構ありふれた格好だと思っているが、ここではそうではないようだ。
「まあ、まずそこはおいて――」
「だいたい、お前ハーダンティスの人間じゃないな。おまえのような顔立ちの人種が外国にいるのを何かで見たことがあるぞ」
なんだか今度はこちらの意見が無視されっぱなしなのだが、それよりも……。
はーだんてぃす？　それは何処だ？
華の高校は一年生はまだ地理の授業がないせいなのか、そういった分野に疎いせいなのか、全然知らない。
……ただ、意識が回復してからもう嫌な予感しかしなかった。
「俺は日本に住む、いち高校生だ」
相手が外国人であることから、あえて自分の祖国の名を出す。しかし、返ってきたのは、
「ニホン？」

きょとんと小首を傾げ、華の母国の名を反復する少女。これが演技なら少女はプロになれそうだ。……というかマジ？

冷静で誇らしいなどと考えた自分が愚かだったと気がついた。今は、滅茶苦茶動揺している。冷や汗が体内から再放出、もとい大放出されていた。

「日本だぞ？　ジャパンだぞ？　今時何処の国でも分かるだろ。お前だって日本語喋ってんじゃねぇか」

焦りのせいもあり言葉が荒くなる。固有名詞も、英語を混ぜるが、

「はあ？　何言ってんだ？　お前。そんな所知らないぞ」

嘘だろ！

心の嘆きを押さえ込み唖然とする華に少女は続ける。

「それにあたしが喋ってる言葉はアイノース語だ。日本語なんてもんじゃない。おまえ自身、アイノースを喋ってるだろ」

初めて少女が一人称を言い、それが「あたし」なのに少し安心した、なんて考えてる場合じゃない。

あいのーす語？

これで始めて聞く言葉を二つ知った。本日最高の嫌な予感は的中したのか……。

日本という自分の祖国は大抵の国は知っていると思っていた。そしてその解釈で間違いはない筈だ。――それでもこの少女は知らない。

日本語を話しながら、それは日本語ではないというこの少女。

ハーダンティスと呼ばれている、全く知らない場所。

もう途方に暮れるしかなかった。

……ここは、俺のいた世界じゃねぇのか？

ハーダンティスへようこそ。（後書き）

次回は少女とシゲルの自己紹介となります。

彼女もお前の力となる。（前書き）

主人公の華君が身に着けているものは学ランですが、私んとこはブレザーでした。

彼女もお前の力となる。

「お～い、どうした。目が死んでるぞ～。」
これは夢に違いないと、漫画等によくあるベタな現実逃避に陥った華は、男勝りな少女の声に呼び戻された。
「お前、日本だかジャーパンだかに住んでるって言ってたな。それって何処にあるんだ？」
ジャーパンじゃないジャパンだと訂正したが、それ以上答えようがない。とりあえず口だけでは説明しづらいと言っておく。
仮に、この世界の地図を見たとしても場所の見当すらつかないかもしれないが。
少女が手に持った棒を回転させている。棍棒のように見えたがその素材は木ではないようだった。赤みを帯びているが鉄なのだろうか。それは五〇センチ程の長さで端のほうに、垂直に短い棒がついている。その取っ手のような部分を持ち、手首を返すことで回転させながら、また聞いてきた。
「それならどうやって、その場所から急に現れたんだ？」
尋問かこれは？　そういえば、さっきも「いきなり真っ黒で不気味なもんが現れた」とか言われてたな。どうやって来たかなんて、そんなこと、
「――――俺自身が一番知りたい」
本屋に入ろうとして全身、激痛に襲われた。薄れ行く意識の中で、光が発生したことを覚えている。ここへどうやって来たかを考えるなら、あの光が原因になったとしか考えられない。
誰が、何が、あの光を発生させたのだろう？
いや、原因などどうでもいい。今思っていることは、早く帰りたい。それだけだ。
まともな答えが返ってこないのが不満なのか少女は少し機嫌を悪

くしたようだ。
「じゃあさっきからずっと持ってる、それは何だ？」
華はようやく、手に入れたばかりの大剣を持ったままだと気づいた。あまりにも軽いため片手でも持つことが容易に出来、その存在を忘れてしまう。
また答えることができない。分からないことだらけだ。
ズボンのポケットには携帯が入っている。しかし、こんな場所では誰とも連絡は取れないだろう。圏外でなくてもだ。そもそも動いてくれるのかも怪しい。一緒にここへ来たのか華の鞄が脇に落ちていた。中身に、この状況で役に立つものが入っているとは思えない。普通に学校に通っているただの高校生が、異世界で役立つものを入れているわけもない。
深刻そうな顔で沈黙し俯いている華に、目の前の少女も困っているのが感じられた。
――きゅるるぅ～。
「あっ」
そのときこの場の雰囲気には不似合いな気の抜ける音が聞こえた。どうやら発生源は自分の腹部からしい。今の時刻は知らないが、華は夕飯が近くなったときにここに来たのだった。
空腹の音としては少し大きかったため、少し恥ずかしい。
「おまえ、何も分からない上に腹まで減ってるのか。最悪な状況だな」
呆れたように息を吐き出し、縁起でもないことを言われた。その通りだが。
華のいた所でなら使える金もいくらかあっても、ここで使うことは無理だろう。なら食事にありつくことも大変かもしれない。もしここに残ることになったら、どうすればいい？
「なあ」
少女が声をかけてきた。
「なんなら、あたしの弁当でも食うか？」

唯一少女の性別が言葉で分かる、価値を持った一人称を使っている。
申し出は素直にありがたい。この少女から発せられたことがかなり意外だった。思案するよりも、無意識に出てきたものは確認の言葉だった。
「……いいのか？」
「さっきまで食ってた。今は別に問題ない」
「サンキュー　ホント助かる」
「あ、ああ」
こちらの声に気圧されているようだったが、今の問題は空腹だ。飢え死になどなりたくない。
河川から出た少女は、素足だったようで靴を履く。華も後に続き、シートに腰を下ろそうとしたが、全身が濡れていたのだった。このまま座るのは、少し彼女に悪い。それに気がついたのか少女は「ちょっと待ってろ」とリュックの中をあさった。
そして出てきたのは黄緑色のタオルだ。
「とりあえずこれで服を拭いて、ある程度は我慢しろ」
「お、おう。助かるよ」
渡されたタオルでズボンや上着を拭き、濡れて申し訳ないがそのまま返した。少女はリュックから一緒に出した小さな袋にしまう。男勝りで乱暴な奴だと思っていたが、結構気が利くいい奴だな。
彼女自身も濡れてはいたのだが、口で言っているほど気にしていないのか、特に対応しないままシートに座った。防水性の優れた服のように思える。華の服にはまだ水分が多く含まれているが、先程も感じた通り寒くはない。むしろ涼しいくらいだ。もしかしたら、ここの季節は春か夏なのかもしれない。
シートのサイズは大きい物ではないため、二人座るのには少し狭い。草の上に足を放り出し少女から弁当を受け取った。言われた通り食べ掛けだったが、まだ、小柄な彼女が食べる量とはあまり思えないぐらい詰まっていた。

一緒に渡されたフォークで食べてみると、なかなか美味い。フォークが良く進む。食べていて気がついたが間接キスだった。華はこだわらないが、あっちも気にしていないようなので幸いである。
「……ところで、必死な食事中悪いが、お前、なんて言うんだ」
許可をもらったとはいえ人の弁当をがつがつ食っていたとは、また恥ずかしいところを見せてしまった。
「ん？」
「名前だよ、お前の名前」
自己紹介ということらしい。確かにお前お前呼ばれるよりはいい。俺から呼ぶときも困るし。
「俺は中野だ」
「なかの？　それが名前か？」
苗字で答えてしまったのは高校生活で名前が使われることがほとんどなかったからだ。
「あ、いや名前のほうは華だ」
「しげる？　どっちにしたって変わってるな」
ここでは自分は変わった存在なのだろう。食事は良くても、自分がいたところとは、やはり違う世界なのかとまたへコんだ。
心境を会話で紛らわすため少女にも促した。
「そっちは？」
「あたしはセレス。ウィン・セレスだ」
こちらの世界ではこんな感じが普通なのか分かりようもない。だから、率直にそれで呼ばせてもらおう。初対面だから一応、上の名で。
「ウィン」
「ん、な何だ？」
……？　今、どもって答えるような場面か？
「何でこんな所にいるんだ？　一人で来ているようだし、アウトドアでもしてんのか？」
さすがに遠足などとは聞けない。どちらにしろ一人でアウトドア

など、あまりないだろうが荷物と周りの雰囲気的にそんな感じがあった。
「あたしにそんな趣味はない。ここに来ているのは馬鹿でドジな親父の代わりに、ラナを狩りに来てるんだよ」
「マジ！？　狩りって危険じゃないのか？」
何、考えてるんだウィンの親は。それともこの世界ではありか？
さすがに少女が一人で狩りをするほど、非常識な世界ではないこと祈りたい。
「お前ラナも知らないのか？　肉食だけどそれほど凶暴な動物じゃないぞ」
肉食で凶暴じゃない動物がいるのか不思議なのだが……まさか猫とかじゃないよな。
「まあ、確かに面倒だけど」
何が確かになんだ。少しは身の危険を感じろ！　といったツッコミも、心の中だけにする。弁当をもらっている身として、あまりとやかく言わないほうがいい。それ以前に、指摘したところでまともな返答など期待できない。それくらいは話しているうちに分かってきた。
「でもさ、狩るのは割と楽しいって気づいたんだ」
そういってまた、細長く端のほうで垂直に一本突き出ている棒を振り回す。何かで見たことがあるが名前が思い出せない。
「出血が多いと早く悪くなるからな。動き回ってるラナをこんな感じの物で、殴って仕留めるんだ」
この袋に三匹入ってるぞ、と言いながらウィンはシートに置かれていた皮袋を取った。あまり大きな生物は入らなそうな袋である。三匹と言っていることから『ラナ』とは小さな動物なのだろう。自分と同年代であろう少女が、小動物を撲殺。……あまり想像したくない絵だ。
「でもさ、父さんが獲る量には全然足りないんだ。それが少し悔しいんだよな……」

先程は父親のことを『親父』と言っていたが、今度は『父さん』といっている。これが本来の呼び方で、不満があれば親父となるのだろうか。そんな使い分けをするのも分からなくもない。なんだかんだ言っていても父親の存在は大きいようだ。

少し落胆していたウィンは、ハッとしたように皮袋を隅に寄せ、「今食ってる弁当にも、ラナが入ってるぞ」と取り繕うように言い、弁当の中の一品を指差した。

「それがラナの唐揚げだ」

まだ手をつけていない物だったので、食べてみる。

「お、いけるなこれ」

食感は鶏肉。そしてラナと呼ばれる動物自身なのか味付けが良いのか、かなり美味い。

「だろ、あたしも大好物なんだ」

自分の好物が賞賛されたのが嬉しかったのか、華に対して初めて笑顔を見せた。

――その表情が結構眩しくて。

華は弁当に向きなおし、あまり見惚れないよう食事に集中した。

彼女もお前の力となる。（後書き）

ラナっておいしいんですかね？（笑）

真紅の武器を手放すな。（前書き）

ちなみに△がつけばウィンパート。○がつけばシゲルパートとなってます。

真紅の武器を手放すな。

△

あらかた弁当の中身がなくなってきたとき、ウィンは声を掛けた。
「お前、これからどうするんだ？」
急にフォークを動かす手が止まる。予想通りシゲルは黙っていた。どうやって来たか分からない。つまり帰れない。食事もまともに取れていない。そんな奴が自分の目の前にいる。
両親の育て方は周りの家族環境を知ってから、かなり変わっていることに気づいた。それでも人間的には良く育てられたと思う。
だからなのか、
「行く所がないなら、あたしんちに来るか？」
このまま、ここに残しときたくなかった。危なっかしいし、なにより後味が悪すぎる。
「いいのか！？」先程の言葉より気合の入った確認だ。
「ああ、多分父さんも母さんも許してくれると思うぞ」
そこまで、心の狭い両親ではないと信じたい。
「――よっしゃあ！」
そんなに嬉しいのか、シゲルは叫びながら、右手の握り拳を胸の前辺りで掲げかなり喜んでいた。それが見たことのない喜び方で、
「何だ？　そのポーズ？」
聞いてみると一瞬きょとんとしていたシゲルは、あっそうか、とまた同じ形をとった。
「これはガッツポーズだ。ん～何と言うか、嬉しいときとか、誰かを応援したいときとかにするもんだな、確か」
そんなものがあるのか、シゲルのいた所には。
「ありがとうウィン！　本当に助かるよ」
ウィンが初めて見たシゲルの笑顔だ。奇妙な格好をして、訳の分

からないことばかり言っていた変な奴だが、明るい笑顔をする。割といい奴なのかも知れない。
今度のありがとうも最初とは違う、きれいなアイノース語だった。
……あの違和感は気のせいだったのか。
少し考えている間に弁当の中身が空になり、シゲルはフォークを置いた。
「弁当ご馳走様。美味かった。ウィン、サンキューな」
……まただ。またシゲルのアイノースがおかしい。何故さっきのように話さない。
かなり違和感を持ったが、こんな笑顔の奴にあまり水を差すようなことを言えず「あ、ああ」と、また濁った返事しか出来なかった。

シゲルのこともあるので、ラナ狩りはもう切り上げることにした。ウィンは手持ちの腕時計で現在の時刻を確認してみる。
「まだ一時半ぐらいか」
「もしかして、まだ獲る量足りないのか。だったら全然構わないぞ。何なら手伝おうか？」
ただ今の時間帯を言っただけなのだが、気を遣わせてしまったようだ。
「というか、ホントに俺を連れて行って大丈夫なのか。ほら食料とか貴重だろうし。狩りをするのもその為なんだろう？」
「大丈夫だそれくらい。確かにラナを狩っているのは食糧確保のためだが、そこまで切羽詰った生活は行っていない。あくまで副次的にやっているだけだ」
それにお前にはそんな他人の心配を言っていられる余裕なんてないだろう、と続けて言うと、「……ごもっともです」なんて弱気な答えが返ってきたので、少し吹いた。変な奴。
ラナの入った皮袋を腰に戻し、出していた荷物はリュックにしまった。
今回ラナを殴るのに使っている『それ』も片付けようとすると、

「ところで、さっきから気になってたんだが、そのかなり赤い棒は何だ？」
　こちらもお前の存在が気になりっぱなしなのだ、と思ったが、あまり事情を把握できていないようなので後にしよう。とりあえず今の質問に答えてやることにした。
「これか？　確か『トンファー』って言う遠心力を利用した武器だ。家の蔵から掘り出したんだけどな、なかなか面白そうだったから今回試してるんだ」
　父さんはいつもめん棒みたいなの使ってるけどな、と補足し目の前で取っ手部分を持ち、振り回してみせる。華にとっては珍しいものなのか、興味をそそられているようだった。
「軽いし、なかなか使いやすいぞ」
　ある程度振り回して見せ、ウィンはトンファーを片付けた。中身が詰まったリュックには入らないので脇のほうに引っ掛けておく。
「片付いたな、さあ街に戻るとするか」
　リュックを背負い、シゲルの方を見てみると何故か驚いたような顔していた。
「どうした？」
「街があるのか？」逆に尋ねられる。
「あるに決まってるだろ」
　何を言っているんだこいつは。でなければ、あたしはどこから来たというんだ。
「それともなんだ、あたしが狩りをしているのはそこらの狩猟民族だからだとでも思ってたのかぁ？」
　だとしたら、『そこらの狩猟民族』の人を馬鹿にするわけではないが、失礼だな。こんなに現代的な道具を用意しているのに、そこまであたしは変わってるように見えるか。
「ごめん、思ってた」
　……コイツ。
「×××！」

目の前で何か悶えているが、放っておこう。ウィンは街へ向かうため足を進めた。
歩く道は人の手がかかっていなくとも十分に動けるほどのスペースが木々の間にはある。
「ちょっと待てぇ！」
シゲルは自分の荷物である鞄を肩に掛け、思ったよりも早く追いついてきた。
右足の脛を押さえて。
「器用に走るなあ、お前」
「やかましい！　気に障ったかもしれないけど、いきなり思いっきり蹴ることないだろ！」
「ちゃんと加減したって。本気でやれば脛骨なんて砕ける」
「……マジで」
「マジで」
シゲルは少し青ざめている。伊達に変な親たちに鍛えられていない。その意味は分からないが、強くさせられているのは確かだった。骨を砕いた経験などはさすがにないが、ひび位なら軽く入れられる自信はあった。
――ところで、
「お前、そのでっかい剣、何なのか分からないのに持っていくのか」
器用だと思ったのはそのこともある。シゲルは大剣を片手で持ってここまで走ってきたのだ。そこまで体が出来ているように見えないが、中身はしっかりとしているのだろうか。
それとも……剣が軽いせい？　実際に持っていないので推測にしか過ぎないが、シゲルを見ている限り重い物を扱っているようには見えなかった。
「一応ここに来たとき、いつの間にか抱えていたし。何かの手掛かりにでもなればと思ってな」
あの時叫んだのはその剣が原因か。
「そんなもんが手掛かりになるのか？」

「仕方ないだろ、本当に何でこんな所に来たのか分からないんだから」
「というか、それ本物？」
シゲルの存在の次の次に気になる事項だ。存在の次は出現方法であることは言うまでもない。
「まだ分からない。鞘を外して中を見たわけでもないし」
「何でだ？　早く外してみればいい」
「そうしようとしたとき、後ろから吹っ飛ばしたの誰だよ」
どうやら無視されたのを怒って、蹴り倒した時のことを言っているようだ。
「アレもちゃんと加減したって、それにあれはお前が原因だろ」
「だからって蹴飛ばさなくたって――」
「まあ、まず中を見てみるぞ」
続けようとした言葉を途中で折りウィンはシゲルから剣を取り上げた。持ってみると本当に軽かった。そこら辺に落ちている木の枝くらいかもしれない。
「あ。こら、勝手に――」
何か言っている気がしたがウィンは放っておき、剣の紐を解いて鞘を外してみた。

○

剣から鞘が外され、初めてその長い刀身が露になる。
それは炎の揺らめきのような刀身を持っていた。
そしてそれ以上に、驚かせたのは、
（赤い剣！）
炎の赤ではない、見たことのありそうな真紅をその剣は帯びていた。
まるで、この世界に来る前、教室で見た夢に出てきた剣のように。

「へぇ〜。赤い剣なんて初めて見た。オモチャじゃないか？　これ」
呑気なことを言いながら、ウィンは鞘を地面に置き近くの木に寄って行く。
木を目の前にし、両手で振り被った。
「ちょっ、おい！　何をする気だ」
「何って試し切りに決まってるだろ」
ウィンは怪訝な顔でこちらを見ているが、華（しげる）は重要な手掛かりである気がしたのだ。
予知夢だとか正夢の経験など今まで全くないし、信じてもいない。だが、こうして目の前には夢で見たものと似ているものが存在している。あまり乱暴なことをして壊したりしたくない。まだ本物かどうかも決まったわけでないが、それでも貴重な情報にな――
「せーっの！」
華の静止をあっさり無視し、ウィンは剣を右上から左下へと薙ぎ払った。
剣はその軌跡に何もなかったかのように通過する。同時にギギギッという音が聞こえ、
……けたたましい音が聞こえたと思った次に対象は倒れた。
ほ――
『本物だ！』
ウィンの声とハモった。ウィンの声は興奮、自分のは上擦り焦っていた。
「すごい！　こんなに軽いのに切れ味良すぎだぞ。変わった刀身だけど刃こぼれもしてない」
まだ何か続けているが、それどころではない。地面に落ちている鞘を拾って、華は急いで駆け寄った。
「貸してくれ」
凄まじい事態を見せ付けられ、声を切らせながら先程とは逆に今度は華が剣を取り上げる。刃の切れ味をたった今見たばかりで、抜き身のまま持つのが怖く慎重に鞘にしまった。

「何だ？　お前は試し切りしないのか？」
「当たり前だ！　こんな危なかっしい物振り回せるか」
つまらない、などと危険極まりない発言を言っている。気にしてなどいられない。華は鞘につけられた紐できつく鍔と鞘を結んだ。
「俺がここに飛んできた手掛かりになるかもしれないんだ、これは俺が持つことにする」
本当は、これが見知らぬ場所で目覚めたとき抱えていた剣でなければ、あるいは夢に出てきた剣でなければすぐにでも手放したい気分だ。それでもこの剣が危険なものであると分かった以上、なおさら重要性を嫌でも感じてしまう。安易に手放してもとの世界へ帰るすべを失いたくはない。何か貴重な情報源となっていてほしかった。
「別にいいけど。あたしは剣術には興味を持てなかったからな」
ん？　今の口ぶりではそれを習っているように聞こえるが……。
「剣の扱い方とか知ってるのか？」
「まあ、一応な。あたしの親、あたしが小さいときから修行だとか言って、結構いろんなことやらせるんだ。それが他では誰もやっていないって気づいたのは確か、十歳ぐらいになってからだな」
「……」
今ではもう慣れてきて、純粋に体を動かして楽しいんだ、などと続けて言っているウィンに対して、華には返すべき言葉が見当たらなかった。
一人で狩りをしたり、やたらと力強かったり、剣で樹をぶった切ったり出来たのはどうやら親の子育ての仕方が原因のようだ。それにしたって、修行とは……。そんな単語を使うのは寺院の僧ぐらいだと思っていたが。誰もやっていなかったと言っていたことから、ウィンの家は相当変わっているようである。
前向きに考え、この世界の人々がウィンみたいな人ばかりなわけではない、と華は解釈することができ、少し安心した。
「あ、斬り方教えてやろうか？　いくら剣の切れ味が良くても、ちゃんとコツとかあるんだぞ」

「いいや！　遠慮しとく！」
こんな危険な剣を使う時など、一生なくていいと思った。

真紅の武器を手放すな。（後書き）

修行という言葉を私が初めて聞いたのは、ドラ〇ンボールですね。
次回は、ウィンとシゲルのほのぼの会話です。

お前の役目も街にある。（前書き）

ウィンのいた森と街は割と離れていますが、彼女にとってはいい運動です。

お前の役目も街にある。

切り倒した樹は処理の仕様がないので、自然の成り行きに任せることにした。ウィンが狩りをしていたところから考えて、彼女の知らない他者の私有地と言うわけでもなさそうだ。でなければ人の支配を持たない純粋な自然の産物だろう。どうやらウィンは森の深いところで狩りをしていたわけではないようで、思っていたよりも早く森林を抜けることが出来た。

遥か前方に建物が広がっているのが見える。ウィンの指摘によるとあれが街らしい。それ以外には人工的な景観は何もなかった。華の故郷のように水田や畑などはない。ただ草原が広がっているばかりだ。空には太陽が真上を通り過ぎたあたりの位置から、遮る雲もなくかんかん照りとなっている。

「あんな所から、ここまで来たのかあ？」

「そうだ」

そうきっぱりと言われても……勘弁してほしい。地平線だからその存在は見えるものの、距離ではどれくらいなのか分からない。ただ一時間弱は掛かりそうな気がする。体力は人並み以上だと自身はあるが、華の脳細胞は数々の展開を理解するのに遅れ気味で、肉体的にも精神的にも疲れていた。

「ほら、行くぞ」

ウィンはこちらを見ずに歩き出していく。また走るのは遠慮したいので、華も少し後ろからついて行った。

軽さに関わらず剣をずっと手で持っているのは面倒なので、華は学生服の背中部分に上から通して入れることにした。幸い地面に引きずることもない。鍔の部分が首根っこ部分に引っかかって落ちることもなさそうだ。少し歩きづらいが手が空いて楽だ。

その空いた手で携帯の電源を確かることにした。ズボンのポケッ

トから取り出し電源を入れようとする、が、虚しく黒い画面が光を発することはなかった。これが必然的な現象なのかもしれない。役に立たない携帯を肩に掛けていた登校用鞄の狭い空間にしまう。同時に鞄のメインの空間も確認してみた。中には筆記用具、空の弁当、読みかけの本、宿題のあった教科一式、必要性を感じないプリント類が多量に挟まっているクリアファイル。予想通りというか、使えそうなものはない。こんな事態にある筈がなかった。

……時間が出来たら本でも読むか。

そんな気楽な時間があるかはあまり期待できないが。もとは、高校生活に疲れたときの現実逃避として始めたようなもの。知らず知らずのうちに、本自体が好きになっていた。

今、読んでいるジャンルは、何の因果か、海外の作家が書いたファンタジー小説。身の周りに起きている出来事も、幻想的。だが、――現実。

ほんの少しでも良い。この現状でも楽しませてくれるような内容が書かれていてくれ。

華は鞄の大きい口のファスナーを閉じ、また鞄を肩にかけた。

「華」

ウィンが振り向かずに声を掛けてきた。機会を見計らっていたのかとも思えるほどぴったりなタイミングであるが、偶然だろう。まさか気を使ってくれていたということはあるまい。

「何だ？」

どうでも良いがようやく氏名が使われた。上の名だとか、下の名だとかウィンは気にしないようで（華が気を回し過ぎなだけかもしれないが）久しぶりに家族以外の人に呼ばれる名前は、なんだか新鮮だった。

「お前、日本のいち高校生だとか行っていたけど、歳幾つだ？　見たところあたしとそんなに変わらないようだが」

……ちょっと待て。

「ウィン、高校生って分かるのか？」

高等学校という施設がこの世界にもあるのか――ここは俺の世界と似ているのか？　それだけで似ていると判断するには、まだ情報が足りないかもしれないが、共通点があることにかなり驚いた。そういえば弁当の中身もそんなに違わなかったような。なんというか中身や調理の仕方にさほど違いはなかった気がする。必死に食っていたからおぼろげな記憶だが。

「分かるだろ、普通。それこそそこらの民族で無い限りな」

明らかに勘違いしたときの事を根に持って言っている。また蹴りは止めてほしい。軽い冗談だったというのに……頭の固いことだ。

「ちなみにあたしは高一で、今年で十六だ」

歳と小・中・高の学校の分け方も一緒なのかもしれない。そこまで同じでいるのに何故ここには日本がなく、ハーダンティスとか言う場所があるんだ。パラレルワールドか？　結局、異世界に違いないが……。

とりあえず、考えても分かないので質問に答えた。こちらもそんなに変わらないだろうと思っていたが、タメだったか。

「俺も高校一年で、半年くらい前に十六になった」

もっとも、そう言ったところでこの世界の今日の日付が分からない以上、またすぐに誕生日を迎えたりするかもしれない。迎えたところで、何か変化があるわけではないが。

「同学年だったか、少し意外だな」

「ん？　それはどういう意味何だ？」

良い意味でも、悪い意味でも捉えられそうな発言だ。

ウィンが歩きながら、こちらを向いた。草しかないような地形なので転ぶ心配はない。

「今時、そんな真っ黒で奇妙な服を着ている奴が、高校生だとは意外だなと思っただけだ」

……分かっていた気がする。男勝りなこの少女から誉め言葉などないことなど。

「狩り少女に言われたくはな――」

続けて言おうとした言葉を、慌てて止める。正面を歩いている人物が立ち止まって、青い瞳でこちらを強烈に睨んでいた。どうやら、狩り関連の言葉はＮＧワードのようである。……今度こそ砕かれるかもしれねぇ。あながち冗談ではないことを思いつつ、急いで元の話題を続けた。

「この格好で登校するのが俺等んとこの決まりなんだよ」

「そんな格好でか？　変わった学校だな」

もう、なんとも言いようがない。この世界では、華の存在の方が変わっているのだと、この少女との会話だけで十分に感じている。

「じゃあお前、学校サボってここに来たのか？　あ、今は夏休みか。ん？　でもならなんで、お前はその格好なんだ？」

学校があれば長期休暇もあるのだろう。万国かつ、異次元共通事項を見つけた気がした。

「俺たちの学校はまだ登校期間だ。たぶん時差の関係でそっちとは違うんだろうよ。それにサボった訳じゃない。学校から帰る途中で、何故かここに来たんだ」

本当に時差の関係だとは思っていないが、なんて言えば良いのか分からない。下手な事を言えばややこしくなりそうだ。出来るだけ面倒なことは避けたい。

華の言葉でこの話題は収まった。立て続けに言われた内容から、ここの今の季節が夏だと分かった。どうりで、濡れた服が涼しく感じ、太陽からの殺人光線で乾き始めているわけだ。さらにこの世界の学校のことも少し知ることが出来た。やはり似ている。

帰るには満たないが、ここでどれくらい過ごすのか分からないのだ。ある程度の知識は持っておきたい。

こちらからも質問をしようかとも思ったが、まだ相当歩かなくてはならない道のりが残っていた。歩きながら会話するのも良いが、今は体力を温存しゆっくり出来る場所ですることにしよう。

……などと考えたのがまずかったのか、それから先は本当に会話がなく、だんだんと気まずくなってくるも、どう切り出して話しか

ければよいのか分からずにいた。学校ではほとんど読書ばかりしていたため、最近会話が苦手になってきている。

ウィンから話しかけられることもなくなり、長い時間沈黙が二人を支配していた。

お前の役目も街にある。（後書き）

日本で着られている学ランが、海外にあるのかどうかは私はわかりませんが、多分変わってます（笑）。次回街につきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4550p/

ウンメガ！　赤い武器と女神

2010年12月12日19時25分発行